出度き色のような気がする。

南区の液状化した市道に沿う更地に芽吹く居酒屋、
花屋　　中川弘子

二〇一六年四月の熊本地震から二年（この作の制作時は二年に満たなかったが）、ところどころやっと営業をはじめた店舗を「芽吹く」と表現した工夫に注目。ぽつぽつと開店しはじめた感じがいかにもふさわしい。

鳩万羽あお空一枚反転し銀の翼をかがやかす朝
　　宮地瑛子

多摩川の河原で、箱に入れたたくさんの伝書鳩をいっせいに空へ飛ばすところを見たことがある。何十羽もが一方向に上昇し、やがて一斉にさあーっと方向を変える。この時の感じがまさに「空一枚反転し銀の翼をかがやかす」感じだった。ただ、「鳩万羽」はいかが。「鳩百羽」で充分だったかと思う。

天空海の突きに吹っ飛ばされし翔猿になぎ倒されし
呼び出し哀れ　　鈴木勉

国技館に相撲を見に行った折の作。ここは十両の取り組み。登場するのは三人。AがBを吹っ飛ばし吹っ飛ばされたBがCをなぎ倒したのだ。珍しい四股名の二人をうまく一首に登場させて、楽しい作に仕上げた。

神様が渡ってゆかれしみずうみの岸辺に二羽のツグミが遊ぶ　　鈴木香代子

上句、諏訪湖の御神渡のことだろう。この一首、意味としては諏訪湖の岸辺に二羽のツグミが遊んでいる、それだけである。が、第一・二句によって、諏訪湖が単なる自然としての湖ではなく、歴史的文化的な意味をおびる。この冬は大気が冷えて、見事に凍結し御神渡があらわれたと聞く。下句、いい。上句とのバランス、音のひびきも、自然で魅力的。

雨がもし観光客なら雪国の雪は移民のように留まる
　　武藤義哉

シンプルで直截な比喩の意外さに驚いた。たしかに雨はすぐ乾いて消え、雪は根雪となって春まで残る。観光客と移民、時間の差異だけをクローズアップすればこうなるのかな、とあっけにとられた。

本棚ゆ覗く古びた「スクリーン」廃刊となりまた時の過ぐ　　田中薫

戦後間もなく創刊された映画雑誌「スクリーン」は一九九七年に「SCREEN」と表記されるようになった。古い表記の雑誌はなくなったわけで、そのことを「廃刊」と表現した、と読んだ。自分が映画に夢中になっていた「時」は過ぎ、その後も、さまざまに自分にとっての「時」が過ぎていった。「時」の無常を雑誌を起点にクローズアップした一首。

外つ国の時を働く人々の灯りが揺れる内堀をゆく
　　加古陽

時差のある国の時刻を基準に働く人は、日本時間の深夜とか明け方とか、ふつう会社が閉まっている時に働くことになる。その辺の事情を、上句、簡潔にじつにうまく表現している。ただ、「外つ国」はいかが。また「内堀をゆく」はいかが。